

あとがき

今回は野崎一良(1923~)の鉄とステンレスによる彫刻17点の新作展である。前回の野崎さんの当画廊での展覧会は1983年3月であったから丁度まる3年振りの展示となる。

カタログのテキストは大岡信さんにお願いし、「野崎一良新作展のために」と題する冒頭のエッセイをご寄稿いただいた。野崎一良の人と作品を愛する大岡さんのこのエッセイは野崎さんの芸術を理解するうえで甚だ貴重である。ご一読を希う所以である。

野崎さんと私とは、私が南画廊に勤めている時からのお付き合いでもう12年になる。野崎さんは京都在住の現代彫刻の作家で、京都芸大の先生でもある。ご自宅は洛南伏見の丹波橋にある。近鉄または京阪の丹波橋で降り、国道を越え国鉄奈良線を横切り一寸いったところにある。訪問するたびに棟続きのアトリエをのぞくのが常である。野崎さんに案内されて庭に降り、ツッカケをはき、かなり急傾斜のスロープをくだる。この決して広いとは言えぬ仕事場には新旧の作品その他、仕事台、道具類等さまざまなもののが置かれている。この空間に私はいつも一種の親しみを感じるのである。仕

事場は作家のある側面を問わず語りに示しているものである。この作家はこういうところで仕事をしているのか、とその場面を想像すると、その作家が動きをともなってみえてくるのが面白い。私はこの飾り気のない手仕事のにおいがする空間が好きだ。

最後に野崎さんのますますのご健勝を祈るとともに、お忙しいなかこの展覧会のためにご寄稿いただいた大岡さんに厚く御礼申し上げる次第である。

1986年2月18日

佐谷画廊

佐谷和彦